

# 昭和30年代の幼稚園教育課程についての一考察 —領域「言語」の視点から—

## A Study on the Kindergarten Curricula in the Showa 30s (1955-1964) —From the Point of the Language field—

(2020年3月31日受理)

山本 房子  
Fusako Yamamoto

Key words : 幼稚園教育課程, 言語, 話し合い

### 要 旨

昭和31年版幼稚園教育要領及び指導書と、同年代に発行された教育課程のモデル案（「倉敷市幼稚園教育課程 第2集」, 三木安正編著「年間保育計画」）での「話し合い」の記述を検討した。モデル案には、教育要領等の記述にはない「話し合い」の内容や教師の援助等が記されていた。それは、実践の中の幼児の姿や生活に基づいた内容であり、教師の援助や配慮であった。このことから、当時の教育課程等が日々の実践の積み重ねに基づいて作成されていたことが分かった。そこには、目の前の幼児の言動をどう読み取って、何が必要なのかを問い続ける教師の姿勢が表れていた。

### 1. はじめに

昭和33（1958）年に発行された「倉敷市幼稚園教育課程 第2集」は、倉敷市教育委員会（事務局学校教育課指導係）が市立幼稚園の園長とともに作成し、市内の各幼稚園での活用を願って発行された資料である。

その2年前、昭和31（1956）年に「幼稚園教育要領」が公刊された。この要領では、幼稚園教育の目的や目標を実現するためには、幼児の生活全般に及ぶ様々な経験や活動のうちから、「どのような経験を選び、またどのような形で幼児に経験させたらよいかについてくふうしなければならない。そのためには、どうしても指導の計画を立案し、望ましい経験の組織を構成する必要がある」として、教育課程という用語は使用されていないものの、目的や目標に向かってどのような筋道で教育を進めていくのかを計画するという教育課程の考え方が示された<sup>1</sup>。その後、昭和39（1964）年の改訂で、幼稚園教育における教育課程が法的基準として示された。昭和31

年版要領の原案が昭和29年に発表されたこともあり、昭和30年代は、幼稚園における教育課程や指導計画の作成が一般化した時代である。当時、各地域や保育雑誌等では、様々な形式や考え方の教育課程や指導計画のモデル案が次々と発表された<sup>2</sup>。

先述の「倉敷市幼稚園教育課程 第2集」も当時のモデル案の一つである。筆者が注目したのは領域「言語」の欄である。そこには「話し合う」「話し合いをする」という記述が多数見られる。ここで次の問いが生じた。それは、当時の幼稚園教育要領における「話し合い」の位置づけとの関連である。加えて、教育課程と実際の保育との関連である。つまり、当時、幼稚園教育のなかで「話し合い」というものがどのような意味をもち、どのような実践が行われ、それがどう教育課程や指導計画に落とし込まれていたのかという問いである。本研究では、「倉敷市幼稚園教育課程 第2集」と時を同じくして発刊され、様々な幼稚園や保育所が想定された上での指導計画案が記されている三木安正編著「年間保育計画」での、「話

し合い」の記述も見ていきながら、教育課程をはじめとした指導計画と実践とのつながりを探っていきたい。

## 2. 幼稚園教育要領（昭和31年）から

まず、昭和31年版の幼稚園教育要領における「話し合い」の記述を見ていく。表1は、要領の言語領域の「望ましい経験」を抜粋したものである。「話し合う」「話し合い」の記述は3か所である。（下線部）

この要領に基づき、昭和35（1960）年に「言語」の指導書が発行される。そこでの「話し合い」の記述は、「幼児の言語発達の特質」として5歳児で「友だちとの相談とか話し合いの機会がふえてくる」である<sup>3</sup>。幼児の話し合う姿が増えてくるのか、生活の中で話し合いが必要となる状況が増えてくるのかという点については曖昧である。また、「話をする」の指導目標と指導内容で、「5歳児 ⑥見たり聞いたりした紙しばい、童話などについて話し合う」とあり、さらに、「紙しばい・劇・幻灯・映画などを楽しむ」の指導目標と指導内容で「5歳児 ②紙しばい・人形しばい・劇・幻灯・映画などを見た後で話し合う」、「絵本を楽しむ」の指導目標と内容で「5歳児 ②絵本の中の内容について話し合う」とある。先に述べたように、話し合いの姿や状況といった機会が増えてくるとしながらも、要領等では、話し合いの題材として絵本や紙しばい等を示すにとどまっている。

このことは、昭和23年の「保育要領 一幼児教育の手びき一」の記述を引き継いでいると考えられる。保育要領では、「六 幼児の保育内容 一楽しい幼児の経験 一6お話」で、幼児が自ら話をするように指導することも大切であるとしながら、幼児に「一つの筋を追って話し合いを進めてゆくようなことを求めるのは無理」と記されている。題材についても、おもちゃや遊具、絵本などの題材であれば、「話題がなめらかに展開してゆくこともあろう」となっている。一方、幼児の語彙を広げていくために、遠足や園外に出かけたあとで「話し合いの会を開く」ことはより効果的であるとしている<sup>4</sup>。

この点については、国立国語研究所の村石も昭和35年の資料で次のように記している。「4才児までは話し合いよりも、会話の指導を重視すべきで」、話し合いの題材については、「紙しばいや童話などについて話し合う

表1 昭和31年版 幼稚園教育要領（下線 筆者追加）

### 第Ⅱ章 幼稚園教育の内容

#### 4. 言語

##### (2) 望ましい経験

##### 1 話をする。

- 名前を呼ばれたり、仕事を言いつけられたとき、返事をする。
- 簡単な問に答える。
- 自分の名まえや住所、学級の名、教師の名などをいう。
- 簡単な日常のあいさつ用語を使う。
- きのうあったことや、登園の途中で見たことなどを、みんなの前で話す。
- 友だちの名を正しく呼ぶ。
- 友だちといっしょに話し合う。
- 相手の顔を見ながら話す。
- ひとの話が終わってから話す。
- ひとから聞いた話を、ほかのひとに話して聞かせる。
- ことば遊びをする。
- 疑問や興味のもつものについて、活発に質問する。
- 教師の指導（表現意欲を害さない程度）に従い、正しいことばや語調で話す。

##### 2 話を聞く。

- 教師や友だちの話を聞いたり、友だちどうしの話し合いを聞く。
  - ラジオや教師の童話などを喜んで聞く。
  - 多くの友だちといっしょに聞こうとする。
  - 話をする人のほうへ向いて聞く。
  - いたずらや私語をしないで、静かに聞く。
  - 幼児語・方言・なまりや下品なことばと正常なことばとの区別をだんだんに聞き分ける。
- ##### 3 絵本・紙しばい・劇・幻灯・映画などを楽しむ。
- 絵本を喜んで見る。
  - 絵本について、教師や友だちと話し合う。
  - 紙しばいや人形しばいをしたり、見たりする。
  - 劇や幻灯・映画などを見る。
  - 劇遊びをして、自分の受け持つせりふをいう。
  - 多くの友だちといっしょに、劇や映画を静かに見る。
  - 紙しばい・人形しばい・劇・幻灯・映画などを見たあとで、感じたことを発表する。

##### 4 数量や形、位置や速度などの概要を表わす簡単な日常用語を使う。

- グループの友だちの人数を数える。
- ひとつ・ふたつと、一番目・二番目を使い分ける。
- 日常経験する事物について、数・長さ・広さ・高さ・重さ・形などを表わす簡単な日常用語を使って話す。（いくつ・なんにん・なんびき・ながい・みじかい・ひろい・せまい・たかい・ひくい・おもい・かるい・まるい・しかくなど）
- 遠近・方向・位置・速度などを表わす簡単な日常用語を使って話す。（とおい・ちかい・むこうへ・こちらへ・うえに・したに・まんなかに・まえに・あとに・はい・おそいなど）

ことがふだんの生活的な題材について話し合うことよりも、幼児に活潑な活動をうながし、話題がよくまとまりやすい<sup>5)</sup>。

以上のことから、当時は、「話し合い」という活動が、絵本や童話の内容であれば成立しやすいが、そもそも幼児には難しい活動で、その意味も見えにくいものとして捉えられていたと考えられる。にもかかわらず当時のモデル案「倉敷市幼稚園教育課程 第2集」において、「話し合い」が多数記されていることは、現場レベルでの「話し合い」の捉えと要領等にズレが生じているのである。そのズレを明らかにするために、「話し合い」の記述についてより詳細に見ていく。

### 3. 昭和30年代の資料より

#### (1) 倉敷市幼稚園教育課程 第2集 (昭和33年)

先述の通り、本資料は、倉敷市教育委員会と園長(3名)によって作成されたモデル案である。その構成は、市の考えが記された「序」、「主題、目標、行事一覧表」、「月案」、「保育週案(4月14～19日, 11月24日～29日)」である。「月案」では、月別の主題と目標に基づいて、領域別に幼児の経験や活動、教師の指導の留意点等が記されている。表2は、話し合いの題材を月ごとにまとめたものである。

話し合いの題材は、花見や端午の節句、梅雨等その月の行事や季節、祝日に関するものが中心である。

表3は、月案から、「話し合い」に関連する記述を抜

表2 「話し合い」の題材

4月	花見
5月	種子まき 子供の日 端午の節句 母の日 子鳥の日 食事について
6月	ほたる 麦刈りや田植え 梅雨
7月	夜空を見たこと 楽しかった七夕まつり 海や川へ行ったこと経験 水遊び 夏休みの楽しい計画
9月	月見の経験 虫とり 種子蒔き
10月	運動会 お祭
11月	野や山へ行った時のようす 乗物について 乗物ごっこ
12月	年末大売出し
1月	楽しかったお正月の経験 相撲
2月	発表会について計画

(「倉敷市幼稚園教育課程 第2集」をもとに筆者作成)

粋したものである。

そこには指導の際の留意点や配慮(・)も記されている。例えば9月の「月見の経験」での話し合いでは、「・幼児の口からもれた自由詩をとりあげ話題にする」と、実践での偶発的な幼児の姿も記されている。また、「虫とり」の話し合いでは、「・鳴き声をまねたりとびかたをまねたりして表情豊かに話させる」とあり、幼児にとって「表情豊か」な表現とは、虫の鳴き声や動きをまねることによって得られるものとした幼児の発達や特性を踏まえた上での記述も見られる。

11月「乗物ごっこ」の話し合いでは、「・遊びの前途中等機会あるごとに話し合っって遊びを進展させる」として、話し合いをするタイミングや目的も記されている。

3月の「幼稚園生活」や「1年生になる喜び」の話し合いでは、幼児に「・自分の成長の喜びを味わわせる」というねらいとともに、「・消極的な幼児の中には小学校に対して多少の不安を持っているかも知れないからそれを解消するよう導く」とある。幼稚園の卒業と入学を控えた3月は、小学校入学への期待と不安が混在した幼児の揺れ動く姿が見られる時期である。そのような時期の、幼児の不安を和らげることに留意した話し合いとはどのようなものであろうか。ここからは筆者の幼稚園教諭としての経験に基づく推測である。ここでの話し合いは、幼児同士で楽しみなことや不安なことを共有する、そのことにねらいをおいていると考える。言葉での話し合いのみならず、教師や友だちと共有する空間や時間そのものも幼児期の話し合いと捉えているのである。また、聞こえてくる言葉のやりとりだけでなく、言葉には表れない幼児の思い、友だちの言葉を聞いて「私も勉強が楽しみ」とか「僕も給食が心配だ」と思うことも含まれる。幼児期の話し合いにはそれら全てが含まれていることを示している。

本資料から、当時、身近なことについて話し合ったり、遊びを進めていく中で話し合う時間を設けたりすることが日常的かつ計画的に行われていたことが分かる。それは、当時の保育要領や教育要領において記されている、語彙の獲得や幼児の適切な話し方や聞き方、理解を促進する効果をねらった指導を超えた、幼児の姿に基づいた話し合いの姿とも言えよう。

表3 「話し合い」に関する月別の内容

4月の主題 楽しい幼稚園 誕生祝い	10月の主題 運動会 秋のお祭り
◎花見について話し合う。 ・どんな事にきをつけていたらよいか話す。 ・絵本や掛図を見ながら経験したことや人から聞いて知っていること等を話したり又聞いたりする。 ・よるこんで話し合いのなかまに入るようにさせる。 ・与えられた指示をよく理解させる。 ・遠足に出るから平素無口な幼児には特に話す機会を多く作るようにする。 ・帰ったら経験をひとり宛発表させる。	◎運動会について話し合いをする。 ・元気に喜んで話せるようにする。 ・遊戯競技で遊びながら数量位置速度等を表す言葉を使わせる。 ・一等二等, 一番二番, 早い遅い, 遠い近い, 前に後に等。 ◎お祭について話し合う。
5月の主題 強いからだ	11月の主題 秋の野山 乗物あそび 動物あそび
◎種子まきについて経験した事を話し合う。 ・一粒, 二粒, 大き, 小さい重い, 軽い, 丸い, 四角等 ◎子供の日について話し合いをする。 ・元気で大きくなったことや運動会や遠足等の計画を話し合う。 ◎端午の節句について話し合う。 ・楽しく元気に話して喜び合う。 ・鯉幟の大小, 真鯉, 緋鯉の言葉を知る。 ◎母の日について話し合う。 ・母の生活の様子を話す。 ・自分勝手のおしゃべりは遠慮させ始める。 ◎子鳥の日について話し合う。 ・子鳥の名前や生態について話し合う。 ・聞いた内容がだいたいつかめる。 ◎食事について話し合いをする。 ・いただきます, ごちそうさま等。	◎野や山へ行った時のようすを話し合う。 ◎乗物について話し合う。 ・不思議なことについて質問できるよう誘導する。 ・乗物のいろいろ (種類 今と昔) ・乗物画報を見る。 ◎乗物ごっこについて話し合う。 ・遊びの前途中等機会あるごとに話し合って遊びを進展させる。 ・駅名を呼ぶ, 切符の売買, 発車等。
6月の主題 時計 梅雨	12月の主題 冬のあそび
◎ほたるについて話し合う。 ◎麦刈りや田植えについて話し合う。 ◎梅雨について話し合いをする。	◎年末大売出しについて話し合う。
7月の主題 七夕まつり 夏のあそび	1月の主題 お正月
◎夜空を見たことについて話し合う。 ・皆の顔を見ながら話させる。 ・話す時の表情や態度をしだいに育ててやる。 ◎楽しかった七夕まつりについて話し合う。 ◎海や川へ行ったこと経験を話し合う。 ・特定の幼児丈の話し合いにならぬよう気をつける (ひっこみ 思案の幼児に特に助言して話させる。) ◎水遊びについて話し合う。 ・魚とり, 水鉄砲, しゃぼん玉等 ・友だちが話し終わってから話させる。 ◎夏休みの楽しい計画について話し合う。	◎楽しかったお正月の経験について話し合う。 ・身近で共通な経験であるから話を発展させてやる。 ・雑煮, 年賀状, かるたとり, 福笑い等。 ◎相撲について話し合う。 ・絵本, 写真, ラジオ, テレビ。
9月の主題 きまりよいくらし お月見 虫とり	2月の主題 元気な子供 発表会 ひなまつり
◎月見の経験について話し合う。 ・幼児の口からもれた自由詩をとりあげ話題にする。 ◎虫とりについて話し合う。 ・鳴き声をまねたりとびかたをまねたりして表情豊かに話させる。 ◎種子蒔きについて話し合う。	◎発表会について計画を相談する。 ・自分でしたいものをいわせる。
	3月の主題 ひなまつり もうすぐ1年生
	◎幼稚園生活について話し合う。 ・自分の成長の喜びを味わわせる。 ・発音をはっきりさせるよう気をつける。 ◎1年生になる喜びを話し合う。 ・消極的な幼児の中には小学校に対して多少の不安を持っているかも知れないからそれを解消するように導く。

## (2) 三木安正編著「年間保育計画」(昭和33年)

「年間保育計画」は、昭和31(1956)年より3年間に渡りまとめられ、保育雑誌「保育の手帖」に掲載された保育案が整理されたものである。就学前2年間の幼児の「集団生活の発展」を軸として、集団における幼児の生活や発達及びその指導が記されている。第1章で就学前2年間で7期に分けての「集団生活の発展」についての解説、第2章「月別の保育計画」、第3章「保育環境のちがいと、いろいろな保育案の現わし方」として、様々な幼稚園や保育所の事例が記されている。

表4は本書の月別保育計画「計画の具体化のために六領域に分けた指導の重点」から、「話し合い」に関連する記述を抜粋したものである<sup>6</sup>。

話し合いの記述が、年少組(4歳児)の5月から見られる。また、「言語」のみならず「社会」、「音楽リズム」、「健康」、「自然」の領域においても見られる。話し合いの題材については、年少組では危険なことや困ったこと、自然現象や行事が挙げられている。年長組では、当番等の仕事やきまり、生活の仕方、遊びや園生活の計画や振り返り等である。本書からも、幼児の生活において話し合いが日常的にそして、計画的になされていたことが分かる。

また、本書には、話し合いに対する教師の願いを具体的に記した記録がある。それは「事例19 幼稚園・年長組・12月・月案」である。作成した石井達子(文京第一幼稚園)は、月のねらい「話し合いでより楽しい集団生活を」として、ねらい設定の理由や教師の願いについて、幼児の具体的な言葉や姿を挙げて次のように記している。

- 2年目もこの頃になると、(中略)こどもたち同士、なにか「ゆがみ」があっても当然のように見過している場合があります。遊ぶ時には一番になって散らかすくせに、片づける時になると不思議にいない子、(中略)いつも片づけている子など、強いものに都合の良いことにならないよう、機会をとらえて子どもたちに問題をなげかけてみたいと思います。
- また、この頃の衝突の原因に、意見のくい違いがあります。「チガウヨ」「ソーダモン」「チガウヨ」「ソーダモン」と、いつまでいってもきりがなく、それが腕力沙汰になることもあります。一つのことによってどうして答がちがうのか、どういう場で、いつそれを経験したのか、皆の前で話し合い、自分や相手の主張、それを客観的にきく立場など、話し合うことによって愛情が生れていきます。

- 話し合うことによって、一つの目的に対する共通理解を深めていくことは、仲間同士の結びつきを強くすると同時に、グループとしての活動を、よりたかめることになるでしょう。「Mチャン、オツカイ、イッタコトアル?」「アルヨ、パンヤサン」「何パン買ッタノ」(中略)これから始めるお店やさんについての子どもたちの考え、「オ金モツテカナイト買エナイヨ」「イロンナ店ガナイト困ルヨ」(以下、省略)
- 年少組の時、ゆうちゃんが三十ずつ乗ったら交代するという「きまり」のブランコに、乗り終わったとたん、「三十ジャ少イヤ、ツマンナイナ」と、次にならんでいた、たかちゃんにいったら、その時あわせた子が、みんな、「ソウダソウダ」といって、「じゃいくつにしましょうか」「五十ガイヤ」と改正?されました。こんな気持を自分たちの生活向上のために働かせるようにしたいものです。

この記述から、石井は、身近な生活の中での「ゆがみ」を話し合いの機会と捉えている。ここでの「ゆがみ」とは、片付けをしない幼児や片付けをしない行動に対してではない。片付けをしない幼児がいても、周りの幼児がそれを「当然のように見過していること」を「ゆがみ」として捉え、そのことを幼児に投げかけようとしている。また、話し合いによって、幼児同士に「愛情が生れ」たり、「仲間同士の結びつきを強く」したり、活動を高めることにもつながるとしている。ブランコの場合の「きまり」についての記録を見ると、思いを伝え合うことが生活の向上につながるとしている。これらの記録から、石井は話し合いによって、幼児の人間関係が深まり、社会性や主体性の育ちが促されると示唆している。

## 4. おわりに

本研究では、「話し合い」に限ってではあるが、当時の幼稚園教育要領や指導書と、当時の実践に基づいた資料とにズレが生じていたこと、そのズレとは、話し合いの題材や内容、幼児の話し合いの姿、幼稚園教育における話し合いの位置づけであることが明らかとなった。要領等では、話し合いは幼児にとって難しいとされていたが、実際の現場では話し合いが日常的に行われ、教師が生活の中で話し合うことの必要性を強く感じていたと考えられる。そこには、教育要領等が話し合いに求める、語彙の獲得や話し方や聞き方の技術や能力とは異なる必

表4 「話し合い」に関する月別の指導の重点内容

月	領域	年少組	月	領域	年長組
5月	社会	○登園の途上や園の周囲の状況に注意させ、危険なところを発見させ、危険をさける方法話し合い、約束をきめる。	5月	社会	○前月とりあげた当番の仕事の内容を、技術的にこなし、真面目な態度で、責任を果たしているかどうか、みんなで話し合う。そして、技能差をちぢめるために個人的に指導したり、友だち仲間で協力をさせたりする。 ○グループ単位の行動が、スムーズに運ばれるよう、そのために必要なきまりを話し合いできめる。
7月	社会	○誰とでも一緒にできるあそびや、しごとを取り上げて、グループの中で自分のしたいことをはっきり相手に伝え、相手のしたいことも受け入れて、気楽に遊べるようにしむける。 ・「話し合い」がうまくできなくても、意志が通じ合うあそびをえらぶ。	6月	言語  自然	○話し合いによって、生活をたかめていくよう指導する。 ・日常生活に対する意見を述べ合い、合理的な生活の方法をみんなで考え出すようにする。 ・日常生活で困った問題を発表させて、それを解決するために、みんなで考え合う。 ○興味の持続をはかるとともに、話し合いのなかで科学的にものごとを考えるような芽生えを育てる。
9月	社会	○新しいあそびや、しごとの場合は、実際に試みて困った経験から、どうすればよいかを、みんなの問題として取り上げる。	9月	言語  社会  自然	○いいたいことがはっきりいえるようにする。 ・問題解釈のための話し合いの機会を多く持たせる。そして、自分の意見をはっきりいい、また人の考えもよく聞くことができるようにする。 ○しなれていることは、子どもたちで計画を立て、実行するようにする。そして自分からしようとする気持ちと、何のためにするかということをはっきりわからせるようにする。 ・しごとの種類、仕事の順序とその分担を話し合いできめる。困ったこと的事实を、報告し合って反省する。 ○質問、話し合いから、さらに探求心をもつような雰囲気をつくり出す。
10月	音楽 リズム	○おおぜいで声をそろえて歌うことを楽しむそう だん。 まっぼっくり	10月	言語	○友だちとの話し合いを深める。 ・生活をよりよくするためにグループ生活の在り方の話し合いをする。
11月	言語  自然	○話し合いを進めるために、しゃべり過ぎる子、しゃべらない子を調べて、みんなが話し合いに参加できるような雰囲気をつくっていく。  ○落ち葉ひろい、木の実ひろいなどを通して、自然の変化に関心をもたせ、気づいたことを話し合う。	12月	社会  自然	○話し合い、製作、劇遊び、行事などを通して、クリスマスは贈り物をもろうことばかりでなく、人にも親切にしてあげる意味があることを理解させる。 ○暮の街のいそがしい様子などから、大人たちの生活について話し合い、父、母の役割についての理解を深くする。
12月	社会	○子どもたちに、話し合いなどで、きまりを守らせるような機会をもつ。 ○クリスマスの贈り物を作って、お互いその意味について話し合う。	1月	言語	○今までより大きく、また連続的になった遊びと、自分のグループとの関連を自覚して、自発的に遊びができるように話し合えるように指導する。
3月	言語	○リーダーの呼びかけに応じて、協力的な話し合いをさせる。	2月	言語  健康	○今までの園生活を振りかえって話し合ったり、自分と友だちとの関係がどのように発展したか、グループでの遊びや生活が自分たちの成長にどんな役割を果たしたかなどについて考え合ったり、話し合ったりする。 ○めいめいの一年間の背の伸び方などをグラフに現わして友だち同士くらべあい、話し合う。
			3月	言語  社会	○自分と友だちとの関係が、自分の成長にどのような役割を果たしたかを話し合う。 ○小学校についての話し合いをし、希望を抱かせる。 ○話し合いや評価のときなどに、今までの園生活の反省をする。(規律を守り、自主的に行動し、はっきりと発表し、仕事を完成する態度が身についているかどうか)

〔年間保育計画〕月別保育計画をもとに筆者作成

要感がある。言語の領域を超えた、幼児の生活の向上や遊びの進展のため、幼児同士の関係性の見直しや構築のため、ひいては、幼児の社会性や主体性の育ちを見通しての話し合い活動が行われていたのである。このことから、当時の教育課程や指導計画には、目の前の幼児の言動をどう読み取り、何が必要なのかと問い続ける教師の視点や姿勢が落とし込まれていると言えよう。

津守らは、教育課程とは「各月毎に一定の項目によって子どもにさせるべき活動を配当したような表」ではなく、「毎日の保育を最善に運営していったときに、その記録を積んでいけば実際に実践されたカリキュラムが、そこに残される」<sup>8</sup>と述べている。友田も「カリキュラムは、教師の頭の中で作られたものではなく、子どもの活動を通して実践している間に、問題にぶつかり、これの一つずつ解明しながら、作りあげなければならない」<sup>9</sup>としている。どちらも昭和30年代の言葉である。これらの言葉から学ぶことは多いものの、日々の実践に向かう教師には難しく感じるかもしれない。一方で、幼稚園における教育課程は幼児や同僚と共に作り出していくものであり、それは幼児教育だからこその自由感や広がり、豊かさとして捉えることもできるだろう。今後も実践に基づいた資料や記録から、保育の質の向上につながる糸口を探っていきたい。

## 参考・引用文献

- <sup>1</sup>高橋弥生 他 編著「新版 教育・保育課程論」一藝社 (2018) p10
- <sup>2</sup>岡田正章 編「戦後保育史 第1巻」フレーベル館 (1970) p146
- <sup>3</sup>鈴木信政「保育学講座②保育課程」フレーベル館 (1970) pp260-264
- <sup>4</sup>文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに (1979) p559
- <sup>5</sup>村石昭三『幼児の話し合い能力と指導』「幼児の教育」59 (7) 日本幼稚園協会 (1960) pp20-24
- <sup>6</sup>三木安正 編「年間保育計画」フレーベル館 (1959) pp34-77
- <sup>7</sup>三木安正 編「年間保育計画」フレーベル館 (1959) pp154-155

<sup>8</sup>津守真 他『幼稚園教育課程の運営の研究①』「幼児の教育」56 (7) 日本幼稚園協会 (1957) pp6-24

<sup>9</sup>友田静恵『カリキュラム作製における研究活動』「幼児の教育」59 (1) 日本幼稚園協会 (1960) pp25-30

